今月のエキゾチック症例（第13回 2024年8月）

トリボルナウイルス感染症（前胃拡張症）

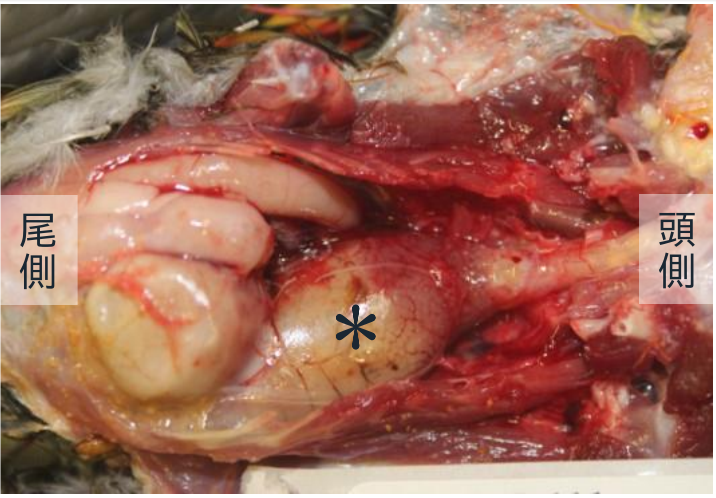

図 1. コガネメキシコインコ，剖検時肉眼写真，腹側像. ＊で示す前胃（腺胃）の重度拡張が見られます。前胃内腔にも多量の食渣が貯留していました。

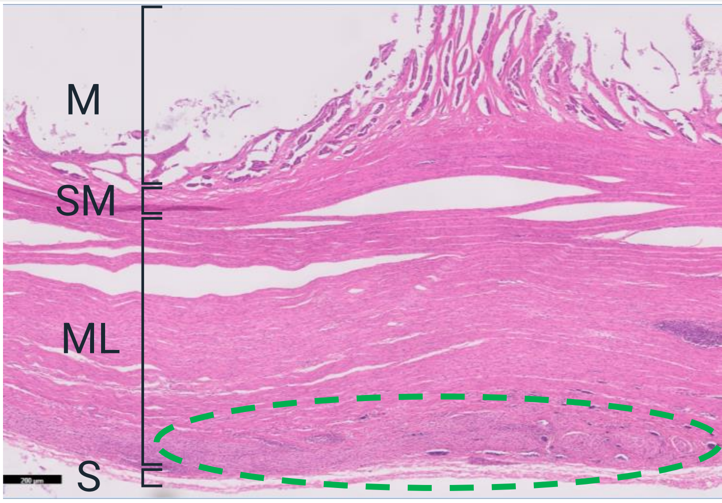

図 2. ルリコンゴウインコ，筋胃，組織写真，低倍像. M＝粘膜，SM＝粘膜下組織，ML＝筋層，S＝漿膜. 消化管の末梢神経叢（点線部）において、細胞密度の増加が見られます。

トリボルナウイルス（ABV）はオウム・インコ類、カナリアなどのスズメ目、水鳥で感染が報告されており、オウム・インコ類では前胃拡張症（PDD）を起こすウイルスとして知られています。

オウム・インコ類において、ABV感染は中枢および末梢神経の非化膿性炎症に起因する急性～慢性の多様な症状を引き起こします。病名ともなっている前胃拡張（図1）は、上部消化管神経叢における炎症（図2，3）によって生じ、臨床的に消化不全や下痢による慢性削痩を起こします。また、前胃拡張により二次的な消化管破裂が生じることもあります。中枢神経に炎症が生じた場合には、運動失調、発作、振戦、失明などの症状が起こります。ただし、前胃拡張はABV感染に特有のものではなく、消化管内異物、他の感染症、および鉛中毒においても生じます。

ABVは垂直および水平感染を起こすと考えられています。診断にはPCRなどの分子生物学的検査や組織検査が有用です。

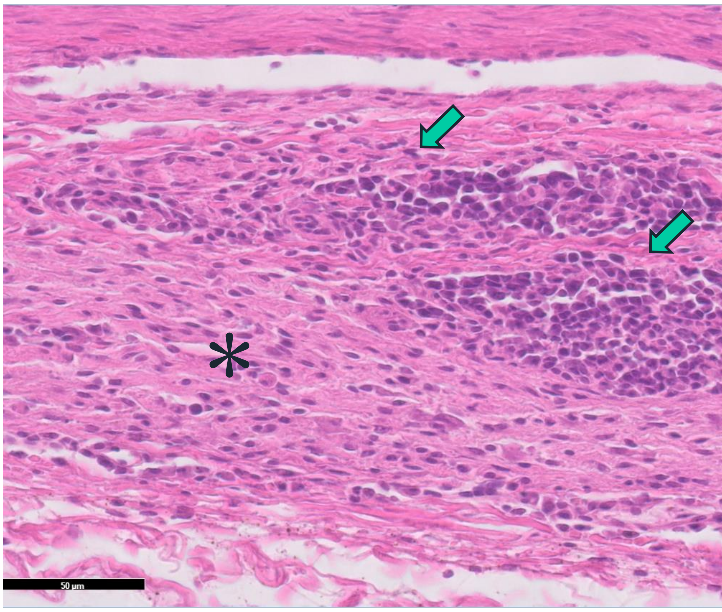

図 3. ルリコンゴウインコ，筋胃，組織写真，高倍像. 図 2 点線部の末梢神経叢の高倍率像です。＊で示す末梢神経叢内に形質細胞やリンパ球（矢印）の浸潤を認めます。

診断医：平島 瑞希
DVM, PhD, DACVP, DJCVP

診断医からの一言

無断での転用/転載は禁止します。

嬉しいことに最近鳥の症例が増えており、今回も鳥類で記事を執筆させていただきました！ 昔から鳥が好きでフィンチ類を多く飼育していたのですが、最近は大型オウム（特にヨウム）を家に迎えたいなと考えています（肉眼写真はうちの子です）。ABV感染は全身の神経系に生じますが、死後剖検において脳の摘出が困難な場合には、上部消化管（食道、そ嚢、前胃、筋胃）を採材すると病変の検出がしやすいと思います。

参考文献

1. Rubbenstroth D. Avian Bornavirus Research-A Comprehensive Review. Viruses. 2022;14(7);1513.
2. Pathology of Pet and Aviary Birds, 2nd Edition. 2015. Wiley-Blackwell.